

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・二八二八
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両足で健全な国体を支える国家」を求めます。

《岸田劉生と森村・松方コレクション》

国立近代美術館
2022年1月29日～3月6日まで

京都国立近代美術館は2021年3月、岸田劉生作品42点を一括収蔵いたしました。全二人のコレクターの所蔵品のうち29点を購入、13点を寄贈いただきました。これにより当館所蔵の岸田劉生作品は油絵24点、水彩画6点、日本画9点を含む約50点となりました。点数が充実しただけではありません。劉生画業の初期から晩年まで各時期の画風をそそぐ、その流れをたどることができるだけでなく、自画像・肖像画・宗教画・風景画・静物画・風俗画(芝居絵)といった各領域を網羅し、版画や彫刻をも含めた劉生の創作活動全体を展望できる内容となりました。

このたびの新収蔵を記念して開催する本展覧会では、当館所蔵の岸田劉生作品を全てまとめて公開するとともに、《外套着たる自画像》や《舞妓図(舞妓里代之像)》、《大連星ヶ浦風景》等の旧蔵者だった森村義行と、その弟で《壘と林檎と茶碗》の旧蔵者でもあった松方三郎にも着目し、劉生の顕彰におけるこうしたコレクションの役割をも振り返ります。(HPより)

《迎十年・馬肉料理専門店「馬野郎」 小田嶋翼さん》

学生の胃袋を掴んだと当時勢いのあったWTさんのQOO店长であった「小田嶋翼さん」が26歳で馬野郎を開店し「QOOの高橋さんは傘下の高瀬川フーズ」「ROSSOを経営継承したONさん」「オマールエビ専門店を開いたNKさん」「イタリアレストラランを開いたMZさん」「ブライダルレストランを経営継承したOTさん」等に資金提供やサポートをしてきましたが、小田嶋さん以外は全滅、高橋さんは何とか鳴かず飛ばず借金増額状態です。

馬野郎小田嶋さんが賃貸借契約更新三回目を済ませ、目出度く十年目への新境地に入られました。右記の通り、通常生き残る事の難しさ、ここにコロナ禍の負荷も加わり、十年を迎えられる事は本当に素晴らしいことと心より慶賛します。

《買い物》

常業臺住職 今小路覚真

携帯電話の画面に誘われて、初めて靴を買いました。

次々と現れる画面の指示に従って、操作は何とか完了し、約束の日に靴は無事届きました。

新しい靴の感触を楽しみながら十日ばかりが過ぎました。足の甲部分の歩くと折れ曲がる場所に小さなシワができました。更に二日ほどで、そのシワ部分の皮が破れはがれてしまいました。

店員の説明も聞かず、試しに足を通すこともなく、手にとつて感じを味わうこともなく買ったことを後悔しました。

全てがそうではないことは分かりますが、デジタルの危うさを実感させられました。

後悔先に立たず、安物買いの銭失い、を実感しました。

宗教法人花鳥寺 土口哲光住職の説法

《走り寄つて抱くように》

作家、僧侶の瀬戸内寂聴尼99歳遷化(11月9日)は、マスコミで作品、宗教活動が大賛辞されて報道、生前が偲ばれる。悩んでいる人がいたら、元気になるように願ひ、パツと動く人であった。15年前、横浜で洋菓子「かをり」の経営者板倉敬子氏が亡くした子息の「偲ぶ会」を営まれ百余人が招待された。中に、寂聴尼が「お母さまの悲しみははかり知れませんが、ご縁で結ばれた方々が大勢集まって来られ、息子さんも当然この場所に居られる。関西には「日にちぐすり」という癒しの薬がある。月日が悲しみを忘れさせてくれます。」と、述べるや板倉氏のもとに走り寄り抱くようにして、その手をしっかりと握りしめた。会場は「優しさ」を言葉で終わらず行動まで伴った姿に感動。

季節の家庭料理

田村真紀

《一月 長芋と柔らか肉だんごのスープ》

《作り方・四人分》

長芋三百グラム・豚挽肉二百グラム・ごま油小匙一・塩、砂糖各小匙三分の一・水四カップ・生姜すりおろし一片分・薄口醤油大匙二・黒胡椒少々・浅葱みじん切り適量

長芋は皮を剥き、滑らかになるまですりおろす。ポウルに冷えた状態の挽肉と塩、砂糖を入れよく練り混ぜる。水大匙五(分量外)を少しずつ加え更によく混ぜ、ごま油、生姜五グラムも加え混ぜる。鍋に水を入れ中火にかけ沸騰したら挽肉を一口サイズの団子に丸めながら入れる。肉の色が変わったらアクを取り長芋を加える。ひと煮立ちしたら弱火にし二、三分煮る。残りの生姜と醤油を加え味を調える。器に盛り黒コショウ、浅葱を散らす。

つれづれの記

山崎辰巳

《歩きやすいまち京都を》

「歩くまち京都」を掲げて十年前、観光も日常生活も「歩く」ことを奨励する街づくりを京都市が始めた。排出ガスの抑制に寄与し、健康生活を促す結構な施策だと思った。以来十年余が経過し、高齢化が進み、市中に限らず地下鉄や市バス利用者の中に、杖や手押しカートを使う高齢者が急増中だ。特に京都一のターミナル京都駅周辺は百貨店やホテル、病院、郵便局などが立地し、利用者も多いが、市バスの停車位置は塩小路通りに面した西端で、周りには横断歩道もエスカレーターもなく、地下街に通じる長い階段があるだけで、どこへ行くにも、歩行に難儀しながら移動されている高齢の方には気の毒で仕方がない。京都市には「歩きやすいまち京都」を一步進めて「歩きやすいまち京都」の実現への施策を講じてもらいたいと思う。